

センタープロジェクト紹介

科学研究費基盤研究(C)

「ウィルソン外交と人種問題との相関 『リベラルな国際秩序』概念の再検討」

代表研究者：西 崎 文 子

本プロジェクトは、ウッドロー・ウィルソン大統領の外交政策の思想的特質とその展開とを、大統領の人種認識、およびそれに関連する文明秩序観が交差する視点から検討することを目的としている。ウィルソン大統領の外交を「リベラルな国際秩序」概念の代名詞として捉える見方は、政治学・歴史学の分野を問わず一般的である。他方近年、歴史学では、ウィルソンの人種主義的側面が注目されることも多く、そこでは「リベラルな国際秩序」や「リベラル・デモクラシー」を掲げた人物という評価との乖離が示される。実際にはウィルソン外交の中で、「リベラルな国際秩序」の概念と人種主義とがある種の調和を見せていたのだろうか。それとも、ウィルソンは人種主義的前提を疑問視せず、人種問題を別の空間に閉じ込めることによって、普遍性や持続性を持つ「リベラルな国際主義」や「リベラル・デモクラシー」の理想を掲げることができたのだろうか。アメリカにおける人種主義は、アメリカ外交の「リベラルな国際主義」にどのような影響を与えたのだろうか。そのような問題意識から、本プロジェクトは、第一次世界大戦期のウィルソン外交を、その背景にある人種認識に注目しながら分析し、それによって、今日の「リベラルな国際主義」をめぐる議論の再検討にも寄与したいと考えている。

初年度にあたる2019年度の成果としては、国際政治学会の機関誌『国際政治』198号で『『ウィルソン主義』の100年』と題された特集の責任編集にあたり、その序論『『ウィルソン主義』の100年——特集に寄せて』を執筆したことがあげられる。この序論では、ウィルソン外交が一世紀を経た今日でもなお、研究や政策決定の場で一つの引照基準となっている理由を分析し、それをウィルソン外交の「同時代性」と「原則性」によるものであると結論づけた。

ウィルソン外交は、第一次世界大戦終了直後から冷戦期を経て冷戦終焉後に至るまで、時々の時代状況を反映し、解釈・再解釈を繰り返しながら語り継がれてきた。その評価も大きく揺れ動いてきたが、その理由は、歴史家や知識人たちが、ウィルソン外交をプリズムとして同時代の問題に切り込もうとしたからである。また、実際にはウィルソン外交は理想主義的というより、現実主義的・実利主義的な側面が強かったといった研究成果が積み重ねられてきてはなお、ウィルソン外交への関心が失われないのは、ウィルソン大統領自身が原則に固執し続けたことにより、その原則が国際政治で独自の役割を果たすようになったからだと考えられる。毀誉褒貶がありながらもウィルソン外交の今日性が認められる理由はこの二つにあるという論点は、今後、ウィルソン外交と人種主義の問題を考察する際にさらに掘り下げるつもりである。なお、本特集には、8本の公募論文が収録され、

2020年1月には発行される予定である。

長期の海外調査の時間はとれなかったが、9月にはワシントンD.C.の議会図書館を訪問し、ジャーナリストでパリ講和会議にも出席し、エドワード・M・ハウス大佐と親しかつたスティーヴン・ボンサルの資料を調査した。ボンサル、ハウスやレイ・スタナード・ベーカーなど、大戦直後に史料的価値の高い書物を発表した人々の活動や著作の背景を示す一次史料は、ウィルソン外交の同時代史的文脈を知る上で貴重なものであつた。